

このひと

日本分析化学会会長に就任される

寺前 紀夫

(Norio TERAMAE
東北大学大学院理学研究科教授)

1972年東京大学工学部卒業，1977年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了，1978年東京大学工学部助手。1984-1985年フロリダ大学博士研究員。1987年東京大学工学部講師。1990年名古屋大学工学部助教授。1992年名古屋大学高温エネルギー変換研究センター助教授。1993年東北大学理学部教授。2003-2006年清華大学客員教授。2004-2008年CREST研究代表者。2005年日本分析化学会学会賞，2006年日本化学会学会賞，2011年日本分光学会学会賞。2007-2009年日本分光学会会長，日本分析化学会東北支部長，2008年-現在，仙台市科学館協議会会長，2009-2010年日本化学会東北支部長。2010年第59年会実行委員長，2010-現在，日本分析化学会理事。

寺前先生とのお付き合いは30年以上前に遡ります。助手着任後直ちにレーザー分光計測を始め，当会での活動を通じてお知り合いになりました。また当時開催された日中分析化学討論会の準備でもご一緒になり，以来，大変親しくさせていただいています。お互いアルコールにほとんど抵抗感がなく，しばしば危ない状況(今では)に陥ったほろ苦い経験もあります。また，1984年には，博士研究員としてフロリダ大学のJames D. Winefordner教授の研究室に1年滞在され，レーザー分光分析法の研究などで素晴らしい成果を挙げられました。ちょうど私と入れ替わりでWinefordner研に滞在されることになりましたので，フロリダでは危ない状況になる機会はありませんでした，共通の思い出話ができることもうれしく思っております。

寺前先生は，宮崎県のお生まれで宮崎県と鹿児島県で高校まで過ごされており，中学時代は宮崎中学校，志布志中学校，鹿児島南中学校，また高校1年は鶴丸高校，その後宮崎大宮高校と南九州で育たれました。

その後，先生は東京大学工学部で田中誠之先生に師事され，学生時代は「磁気円偏光二色性に関する研究」を，助手就任後は，「フーリエ変換赤外光音響分光法」の開発や「熱レンズ分光法による高感度分析」など光熱変換分光法に関する研究を進められました。ちなみに「光熱変換分光法」という言葉は，photothermal spectroscopyに対して先生が名付けた名称であると伺っています。名古屋大学に移られてからは「導電性高分子の電解合成と表面増強ラマン散乱による解析」を研究テーマとされ，照射部位にのみ選択的に高分子を生成できる現象を見いだされました。この成果を基に，東北大学では「表面・界面の分析化学」を標榜され，液液界面に



おける分子認識や液液界面の物理計測の研究を進められ，さらには分子運動が束縛されるナノ空間や核酸二重鎖内の微小空間を分析反応場とする研究を展開されています。このように，移動されるたびに敢然として新しい研究テーマに挑戦され，しかも卓越した成果を挙げておられることに対し，一研究者として心から敬服しております。

寺前先生は宴席での会話を好まれ，飲み物は東京在住の頃はオンザロック，名古屋ではビール，仙台に移られてからは専ら冷酒，と研究内容もさながら嗜好も土地や時代に応じて変遷されています。59年会の折には，各賞授賞式において弦楽四重奏を導入され，受賞者や聴衆にとって心に残る式典になったのではないかと思います。

2011年3月11日には東日本大震災が発生いたしました。先生はPittsburg Conferenceでの招待講演のためワシントンへ着陸されて情報に接し，Atlantaのホテルからメールにて研究室の動静把握や指示にあたられ，地震のため先生に同行できなかったメンバーによって行われた仙台に残留した学生の移動交通手段の支援は報道にも取り上げられるほどでした。私も心配で地震発生後すぐにメールを送りましたところ，翌日米国から返信を頂きました。大変な思いをされていたことに心が痛みました。

先生の薫陶を受けた卒業生からの先生の印象として，「非常にエネルギーギッシュである」という言葉をよく聞きます。学生時代にヒマラヤの7000メートル級の山を登頂された写真を学会賞講演で目にしましたが，そのような経験が先生の実行力，行動力，俯瞰力の源と拝察しております。2013-2014年度の会長として，日本分析化学会を力強く牽引され，学会がさらに発展を遂げるものと期待しております。

〔九州大学大学院工学研究院 山田 淳〕